

『源氏物語』「今参り」考

— 匂宮と浮舟との邂逅をめぐる —

— 匂宮と浮舟との邂逅場面

『源氏物語』「東屋」巻、匂宮が二条院の西の対で浮舟を見出すところから両者の物語は始まる。匂宮が中の君のいる二条院にやってくる時、あいにく中の君は洗髪中であり、女房たちは若君に付き添っていたため姿が見えなかった。暇を持て余した匂宮は、邸の中を歩き回る事となる。

若君も寝たまへりければ、そなたにこれかれあるほどに、宮はたたずみ歩きたまひて、西の方に例ならぬ童の見えけるを、

① 今参りたるかなと思してさしのぞきたまふ。中のほどなる

障子の細目に開きたるより見たまへば、障子のあなたに、一尺ばかりひき離けて屏風立てたり、そのつまに、几帳、簾に添へて立てたり。帷子一重をうち懸けて、紫苑色のはなやか

佐藤洋美

なるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。屏風の一枚畳まれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。

② 今参りの口惜しからぬなめりと思して、この廂に通ふ障子をいとみそかに押し開けたまひて、やをら歩み寄りたまふも人知らず、こなたの廊の中の壺前栽のいとをかしう色々に咲き乱れたるに、遣水のわたりの石高きほどいとをかしければ、端近く添ひ臥してながむるなりけり。 (「東屋」⑥六〇頁)

邸の中を「たたずみ歩」く匂宮は、波線部「西の方」において「例ならぬ童」の姿に目をとめ、傍線部①「今参りたるか」などと思つて中を覗く。「中のほどなる障子」の向こうには屏風が立てられ、その端に簾に添えて几帳が立てられていたが、そこから紫苑色の華やかな桂に女郎花の織物かと思われるものを重ねている袖口がさし出していた。そこで匂宮は、傍線部②「今参りの口惜しからぬ

なめり」と思つて「この廂に通ふ障子」を押し開けて中に入り、「端近く添ひ臥してながむる」女君を見出す。このとき匂宮によつて見つけ出された女君こそが浮舟なのであつた。浮舟は将来を案じた母、中将の君の依頼で二条院の中の君のもとに託されていたのであるが、匂宮はそれを知るよしもない。この後、匂宮は浮舟を「あさましきまであてにをかしき人」と感じつつ、騒ぎに気付いた女房の右近が浮舟を敬う態度をとることから、「いとおしなべて今参りにはあらざめり」と考へて興味を深めていくのである（「東屋」⑥六三頁）。

匂宮と浮舟との邂逅場面においては、動詞を含め「今参り」という語が三度にわたつて用いられている。その中で傍線部①「今参りたるか」については注釈間で見解に相違が見え、匂宮が目にとめた「例ならぬ童」に対して「今参りたるか」と疑念をもつたとするものがある^②一方で、浮舟自身を「今参り」の女房ととらえたとするものもある^③。前者のように、新参の女童に対するものであれば、「例ならぬ童」自身が「今参りたる」者であると考えられていることになり、後者の新参の女房のことであれば、「例ならぬ童」の存在によつてその主人にあたる「今参りたる」女房がいることを想定していることとなるが、傍線部①で「今参りたるか」として「さしのぞき」、さらに、障子の隙間から中を覗き込んでいくこ

とからすれば、「例ならぬ童」によつてその奥に「今参り」の女房の存在が想定されているととらえられる。

従来、匂宮は正篇の「主人公」である光源氏の「すき」と「まめ」を薫と分有する存在と指摘されるなど、深い道心を抱く薫と対照的に位置付けられてきた^④。ただし、匂宮は光源氏とは異なり、物語内において「あだ人」（「紅梅」⑤五二頁）と言われるように、「心の赴くままに奔放に行動する色好み」^⑤なども評される^⑥。そうした「あだ人」たる匂宮のあり方からすれば、当該場面においてはじめて目にした浮舟に近付いていくのも頷けよう。

しかし、本稿で重く見たいのは、「今参り」に対して関心を抱くという匂宮のふるまいである。匂宮と浮舟との邂逅場面において「今参りたるか」「今参りの口惜しからぬなめり」「いとおしなべて今参りにはあらざめり」と、「今参り」に類する語が三度重ねられ、その度に匂宮が浮舟に強く引き寄せられていく。邂逅場面において「今参り」ということは繰り返し用いられ、浮舟が「今参り」の女房であると認識されることが、匂宮と浮舟との物語においてどのようにかわつていくのであろうか。

本稿では、匂宮が二条院で浮舟をはじめて見出す場面を始発点に、「今参り」という語そのものについて検討したうえで、浮舟を取り巻く人々の浮舟に対する意識のあり方を明らかにし、浮舟が

「今参り」と認識されることで描き出される物語世界について考えてみたい。

二 「今参り」の人々

まずは、『源氏物語』および他作品において「今参り」であると語られる人々の例を見ておきたい。『源氏物語』には「東屋」巻の当該場面の三例以外に、「今参り」という語が四例見える。そのうち一例は近江の君が召し使う樋洗童が「いと馴れてきよげなる、今参りなりけり」とされる例（「常夏」③二四九頁）だが、それ以外は全て浮舟の周辺で用いられている。

浮舟の母である中将の君は、浮舟が薰と共に上京することになった折、女房や女童の数が足りていないとして、信頼できる筋から集めるよう指示するが、「今参りはとどめたまへ」と言って、新参の女房は宇治に留めさせる（「浮舟」⑥一六八頁）。中将の君は上京後に女二の宮方と騒ぎを起こすことを危惧して慎重な準備を求めているとされ、浮舟の女房集団に「今参り」の女房が入ることを認めないことは、「今参り」の者を信用していない中将の君の意識によるものといえよう。この時中将の君の指示によつて集められた者たちは、「今参り童」が浮舟の話し相手となるように（「浮舟」⑥一八二頁）、主人の側近くまで召されることもあったが、

それでも中将の君は「今参り」の者に対して厳しい視線を向ける。浮舟が失踪した後、中将の君は女房たちから事情を聞く中で、誰かが事を画策したのではないかと考えるが、その時「今参りの心知らぬやある」とたずねており（「蜻蛉」⑥二〇九頁）、真つ先に「今参り」の者を疑うのである。

このように中将の君は一貫して「今参り」の者に対して警戒心を抱いているが、「今参り」の者はなぜ過剰なまでに警戒されなければならなかったのだろうか。『源氏物語』以外の作品にも「今参り」の者の描写はあるが、そこにはむしろ周囲の人々に受け入れられるか否かがわからず、おずおずと自身の置かれた立場や環境をうかがう「今参り」の様子が語られている。

『枕草子』には、廂につけた車に乗るために女房たちが渡殿を通つて行く時に、「まだうひうひしきほどなる今まゐり」が「つつましげ」にしていることが語られているが（「関白殿、二月二十一日に、法興院の」四〇五頁⁹）、次のような記述も見える。

御返りまゐらせて、すこしほど経てまゐりたる。いかがと、例よりはつつましく、御几帳にはた隠れて候ふを、「あれは今まゐりか」など笑はせたまひて、……

（「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」二六三頁）
しばらく里に下がっていた清少納言が定子のもとに参上したとき、

定子におくった文を氣にして遠慮がちにいたところ、「あれは今まゐりか」と笑われたとされる。定子をはじめ周囲の人々は清少納言が「今参り」ではないことをわかっているながらも、「つつまし」い様子でいたため「今参り」という言葉を使って戯れを言っていることから、「つつまし」さが「今参り」によく見えるふるまいであったことがわかる。

また、『栄花物語』にも、禎子内親王の「今参りたる御乳母」が、道長が側に来るだけで「いとどもの恥づかしげ」になる場面があり（巻第十一「つぼみ花」②二六頁¹⁰）、新たな環境にまだ適応していない人々の不慣れな様子が描き出されているが、「今参り」が「つつましげ」であり「恥づかしげ」な様子を見せるのは当然のことともいえる。「今参り」の者たちは既存の女房集団に新たに参入する者であるがゆえに、新たな環境や周囲の人々の様子をうかがわざるを得ないのであった。

一方、そうした「今参り」を迎える側の人々もまた「今参り」の者の様子をうかがい、試すかのような行動を見せる。『伊勢大輔集』の詞書には、和歌の力量を見定めようとする人々の様子が語られている。

女院の中宮と申しける時、内におはしましに、ならから僧都のやへざくらをまゐらせたるに、二年のとりいれ

人はいままゐりぞとて紫式部のゆづりしに、入道殿きかせたまひて、ただにはとりいれぬものとおほせられしかば

いにしへのならのみやこのやへ桜けふ九重にほひぬるかな

（新編国歌大観『伊勢大輔集』第五番歌）

伊勢大輔が奈良から届いた八重桜を受け取る役を務めたとき、伊勢大輔が紫式部からその役を引き継いだばかりの「今参り」であったため、道長が桜を題材にした和歌を詠ませて力量を試そうとし、伊勢大輔はそれに応えて見事な歌を詠んだ。優れた力量を持つて出仕した者は、能力を示すことで受け入れられ、組織の一員として認められていくこととなるが、その場には他の女房ばかりでなく主人もおり、主人に認められるか否かを試されていたのである。『十訓抄』には彰子のもとに出仕した琴を弾くことに長けている「今参り」の者が、紫式部によつて「いはこす」と琴に由来する名をつけられたことが語られているが、その能力が評価された「今参り」は、名を与えられ、女房集団の一員として認められていたのである。

もちろん、「今参り」の者が受け入れられていくといつても、「今参り」を取り巻く人々の中で、男性たちと女房集団とは「今参り」に対する印象が異なっているようにも思われる。『枕草子』に

は「今参り」に対して好奇の視線を向ける人々の様子が次のように描かれている。

殿とばらなどには心にくき今まゐりの、いいと御ご覽らんずるきはには、
あらぬほど、ややふかしてまうのほりたるに、うちそよめく
衣のおとなひなつかしう、みざり出でて御前に候へば、物な
どほのかに仰せられ、子めかしうつましげに、声のありさ
ま聞ゆべうだにあらぬほどに、いと静かなり。

(「心にくきもの」三三二頁)

中宮の御前に「いと御覽ずるきにはあらぬ」女房が「子めかしうつましげ」な様子で出仕していることが語られるが、その女房は「殿ばらなどには心にくき今まゐり」であるとされている。清少納言はその「今参り」の女房に対して決して好意的な感情を抱いていないことがうかがえるが、男性たちにとっては身分や器量など関係なく、「今参り」であることが惹きつけられる要因になっているのである。⁽¹²⁾「今参り」に警戒心を抱くことなく近付いていく男性たちに対して、女房集団に属する人々は簡単に受け入れることはできない。「今まゐりのさし越えて物知り顔に教へやうなる事言ひ、うしろ見たる、いとにくし」(『枕草子』「にくきもの」六八頁)とも語られているように、「今参り」の者が出過ぎた態度をとることは嫌われ、女房集団が「今参り」に向ける視線はその

外部にある男性たちのそれより厳しく、「今参り」の者を排除しかねないものだったのである。

「今参り」の者たちとは、女房集団にとっては内なる部外者であつたといつてよからう。「今参り」は、新たに参入した組織の一員でありながらも異質な存在として扱われ、いつ排除されるかもわからない不安定な立場にあり、古参の女房たちは「今参り」を品定めするののようにその「一挙手」「一投足を見つめている。『源氏物語』において中将の君は「今参り」の者に対して一貫して警戒心を抱いたが、中将の君にとって「今参り」の者たちは、女房として迎え入れたとはいえ、あくまでも部外者にほかならず、いつ裏切るかわからない者たちであつた。「今参り」は、何かあれば真つ先に疑われ、追ひ払われるべき対象ととらえられていたのである。

しかしながら、ここで注意しておきたいのは、「今参り」とされる者は女房や女童といった主家に仕える者であつたということである。「今参り」ということば自体が示しているように、「今参り」は主人のもとに参入するものであつて、召し使われることが前提となつている。そのように考えれば、たとえそれが誤解であつたとしても、浮舟が「今参り」とされることは、そのあり方を検討するうえで看過できないことのように思われる。

そもそも「今参り」とはどこからやってきて、どのように扱われるものなのであろうか。「今参り」の実態を考えてみたい。

三 「今参り」を好む匂宮

『落窪物語』には、女君の婚姻の折に「今参り」の女房が集められる例が見える。四の君の九州下向にあたっては「今参りども」が「十余人ばかり」集まり「いと今めかしうをかし」と語られ（巻一、一四八頁¹³）、落窪の姫君と少将の結婚のためには「今参りども」が「日に二、三人参り」、「いとはなやか」な邸の様子が描かれている（巻四、三二七頁）。結婚によって形成された新しい家に新しい女房や女童が集められるのは、もちろん家の拡大による必要性から生じたものであるが、それらの「今参り」が「今めかし」「はなやか」と語られることは注目される。「今参り」はたんなる機能的な役割ばかりでなく、その家の威勢を示す役割も担っていたのである。『源氏物語』においても、末摘花が二条東院に転居する折には「よろしき童べなど」（「蓬生」②三五三頁）、玉鬘が六条院に移るときには「よろしき童、若人など」（「玉鬘」③一二六頁）、中の君の上京の折には「よき若人、童など」（「早蕨」⑤三五二頁）、浮舟の上京の折には「童のめやすきなど」（「浮舟」⑥一五六〜一五七頁）がそれぞれ求められているが、それでも「よろしき」「よ

き」「めやすき」などと形容される。そこで新参の者たちに求められているのは、まずは見た目であったといつてよからう。美麗な「今参り」の者たちは、新たな家やその主人を華やかに見せ、家を彩る存在なのであった¹⁴。それでは、このような「今参り」はどこからやってくるのであろうか。

たとえば、『栄花物語』における、藤原彰子が入内する折の記事には「女房四十人、童女六人、下仕六人」を伴うことが語られているが、とくに女童については詮子や一条帝、道長などから奉られているとされ、「院人、内人、宮人、殿人など」のようにどこから奉られたかということが女童の呼び名となっている（巻第六「かかやく藤壺」①三〇〇頁）。「宮人」は彰子方で見つけた童女、「殿人」は道長方から出した童女の意か¹⁵ともされるが、新参の女童が彰子に近い者から献上されていることがわかる。また、『源氏物語』「若紫」巻において若紫が二条院に連れてこられた後の場面には次のようにある。

「人なくてあしかめるを、さるべき人々、夕づけてこそは迎へさせたまはめ」とのたまひて、対に童べ召しに遣はす。「小さきかぎり、ことさらに参れ」とありければ、いとをかしげにて四人参りたり。（「若紫」①二五七頁）

光源氏は、紫の上に仕える侍女たちが少ないことを気にかけ、女

房を按察大納言邸から呼び寄せるよう指示しつつ、女童については自身に仕えていた者を与えている。この例は、光源氏が紫の上を盗み出すように連れてきた折のものであるため、ややさしひいて考えなければならぬが、新参の女童の選定には細心の注意がはらわれていたことがわかる。⁽¹⁷⁾

女君の転居や婚姻の折には新たに女房や女童が参入していたが、それらの者たちは、女君の近親者や縁者が選ぶものであった。しかし、先にあげた『源氏物語』の未摘花や玉臺の転居の折には光源氏は女童を「求め」させているように、その選ばれた「今参り」が縁者であったとは限らない。また、中の君のもとには「去年の冬、人の参らせたる童」が仕えているとされるように（「浮舟」⑥一一三頁）、「今参り」の参入は転居や婚姻の折ばかりでなく、日常的にあったことがうかがえる。古参の女房たちは、外部から参入した「今参り」を用心深く迎え入れ、その主人である女君はそうした女房集団を差配していたのであった。⁽¹⁷⁾

二条院の女房たちを差配する女主人は、中の君であったといえる。しかし、この二条院の女房集団の特徴は、それらが匂宮の管理下にあったとみられることにある。先に挙げた「去年の冬、人の参らせたる童」は「顔はいとうつくしかりければ」とされると同時に、「宮もいとらうたくしたまふなりけり」とされる（「浮舟」

⑥一一三頁）。匂宮は「顔」の「うつくし」い女童に目をつけ、それを可愛がっているのである。

匂宮が浮舟を「今参り」の女房と誤解して言い寄ったことを知らされた中の君は、「さぶらふ人々もすこし若やかによろしきは見棄てたまふなく」と語り、そばに仕える女房の中でも若々しくて器量のよい者は放っておかない匂宮の性情を「あやしき人の御癖」であると評している（「東屋」⑥六四頁）。また、女房の右近や少将は中の君にひけをとらない浮舟の美しさを目にしつつ、「いとからぬをだに、めづらしきをかしょうしたまふ御心を」と語り（「東屋」⑥七一〜七二頁）、匂宮が若く美しい女房に対して興味を持ち、中でも新参の女房に対しては特に強い好奇心を示す人物であると評する。つまり、匂宮は二条院の主人として女房や女童に気を配っているのではなく、「あだ人」ともいわれる気質によって女房や女童を見つめているのであり、中でも新参の女房、いわゆる「今参り」の者に対しては強い関心を示していくのであった。

匂宮のそのような志向性には、匂宮の気質はもとより、その置かれた状況も少なからず影響を与えている。匂宮は、母である明石中宮から軽々しく忍び歩きをすることを諫められ、「御心につきて思す人あらば、ここに参らせて、例さまにのどやかにもなしたまへ」と言われ続けていた（「総角」⑤三〇三頁）。そのため、

匂宮の姉宮である女一の宮のもとに参ったときには、女一の宮のもとに出仕している「やむごとなき人の御むすめ」をはじめ「めづらしき人々」に言い寄るなど（「総角」⑤三〇五頁）、外部から参入した女房が日常的に匂宮の興味の対象となっていたのである。たしかに、「今参り」は華やかな外面を持つ者であった。しかし、そのような「今参り」を好む匂宮の色好み性は、王者性とかかわる光源氏の色好みとはまったく質を異にするものであったといえるよう。¹⁰

匂宮が浮舟に強く引き寄せられていったのも、浮舟を「今参り」の女房であると認識したことによるのであった。ただし、『源氏物語』および他作品において「今参り」として語られるのは女房や女童であり、浮舟は「今参り」として二条院にやってきたのではなかった。それにもかかわらず、匂宮は浮舟を「今参り」として認識することとなる。なぜそのような誤解が生じたのであろうか。「今参り」ではないにもかかわらず、「今参り」として認識されていく浮舟のあり方についてさらに検討してみたい。

四 「今参り」としての浮舟

「東屋」巻の浮舟との邂逅場面において匂宮が「今参りたるか」と興味を示したのは、そこに「例ならぬ童」が見えたためであった。

この女童の存在によって匂宮はその奥に「今参り」の女房がいると判断したのであるが、「例ならぬ童」とはどのような者なのであろうか。

そもそも、二条院に入る前、中將の君と共に常陸介邸で生活していた浮舟は、「女房など、こなたにめやすきあまたあなる」とされるように、「めやすき」女房にかしずかれた姫君であったが、常陸介の実娘の婚姻にともない、それらの女房は連れて行かれてしまった（「東屋」⑥三七頁）。そのため、浮舟が二条院に移動する折には「乳母、若き人々二三人ばかり」を伴うだけで（「東屋」④一頁）、「例ならぬ童」のような女童を連れていたことは見えない。したがって、匂宮が見た「例ならぬ童」は、もともと浮舟に仕えていた者ではなく、二条院に入った折に中の君から与えられた者であり、匂宮も知らない女童であることをふまえると、「今参り」の女童であったと考えられる。このとき、匂宮は「新参の女童を外で見かけたので、その主人にあたる新参の家柄のよい女房かという推測¹¹」をしたと考えてよいだろう。そして、この女童はそのまま浮舟に仕えることになっていたらしい。

灯明うともして物縫ふ人三四人ゐたり。童のをかしげなる、糸をぞよる。これが顔、まづかの灯影に見たまひしそれなり。

うちつけ目かとなほ疑はしきに、右近と名のりし若き人もあ

り。君は腕を枕にて、灯をながめたるまみ、髪のごぼれかかりたる額つきいとあてやかにまめきて、対の御方にいとよ
うおぼえたり。
〔浮舟〕⑥一一九〜二二〇頁

句宮が宇治を訪れたとき、「をかしげなる」童を見つけたが、その女童は「かの灯影に見たまひしそれ」であると語られ、再び句宮が浮舟を見出す場面で同じ女童の存在が見える。このとき浮舟はすでに二条院を離れているものの、中の君から与えられた女童がそのまま浮舟付きの女童として仕えているのであった。

女童もいない浮舟に女童を与えるのは中の君の配慮であったということではできよう。しかし、「今参り」は未だ女房集団に慣れていない内なる部外者であった。中の君がそのような「今参り」を浮舟に与えることは、どのように考えればよいのであろうか。

近江の君は、弘徽殿女御に文をおくるための使いとして、女房ではなく「今参り」の樋洗童を遣わす〔常夏〕③二四九頁。女御のもとに樋洗童を遣わすこと自体、近江の君の「をこ」性を示している⁽²⁾のであるが、近江の君はそうした「今参り」を使わざるを得なかったともいえる。この女童の出自は明らかではないが、近江の君が内大臣の管理下にある状況から推して、内大臣が近江の君に与えた者であると考えてよからう。たとえば、宮の君のもとに薫が訪れた場面では、宮の君の周囲には「をかしき宿直姿」

の女童が二、三人と、「すこしおとなびたる」女房の姿が見える⁽²⁾とされ〔蜻蛉〕⑥二七三頁。女一の宮に出仕するのにもかかわらず、女房や女童が存在する例も確認できる。内大臣も近江の君を弘徽殿女御に出仕させようとしているものの、重々しく扱うつもりは⁽²⁾なく、近江の君には女御のもとに遣わすべき者も与えられること⁽²⁾はなかつたのであろう。

女童は、御簾の外にいて人々にその姿をさらしながら雑用を行なう者であり、その存在は家を彩り、その主人のあり方を示す。句宮は新参の「例ならぬ童」を目にしたとき、そこに「今参り」の女房がいると考えた。それは、浮舟が二条院においては「今参り」の女房として処遇されていた⁽²⁾ということを示しているにほかなるまい。

浮舟をそうした状況に置いたのは中の君である。中の君は、中将の君から依頼を受けたとき、「故宮のさばかりゆるしたまはでやみにし人を、我ひとり残りて、知り語らはんもいとつつまし」〔東屋〕⑥三九頁と、浮舟が父八の宮が生前認知しなかつた人であることを気につけて、浮舟を受け入れるか否かを迷っている。結局は受け入れることに同意したものの、「西の廂の、北に寄りて人げ遠き方」〔東屋〕⑥四一頁に部屋をしつらえて浮舟を人目につかないようにしたうえ、「げに見苦しからでもあらなんと見たま

ふ」と他人事のような考えを持つており（「東屋」⑥五〇頁）、浮舟に対して積極的に関わろうという意識が見えない。光源氏は、紫の上を二条院に迎えた折に自身の女童を与えていたが、中の君は浮舟に未だ部外者ともいえる「今参り」の女童を与える。中の君は浮舟を自身の妹の姫君というよりは、女房に近い者として扱っているのであった。

もちろん、そうした扱い方は、中の君の心情のみによって生じるものではなからう。浮舟が薫によって宇治に移されたのちは、「きたなげなき女房」が「あまた」仕えていたとされるが（「浮舟」⑥一一五頁）、これは薫の特別な配慮によるものであったと考えられる。薫は浮舟が匂宮に連れ出され、女一の宮に仕えさせて他の召人と同じように扱われることを氣にかけている（「浮舟」⑥一七五〜一七六頁）が、むしろそのような扱いが本来の浮舟の立場なのであり、だからこそ薫は多くの女房をつけて浮舟の格上げをはかっているのである。八の宮の姫宮として社会的に認知されていない浮舟に対して、匂宮の管理下にある二条院の女童や女房たちを、中の君は思うままに与えることがかなわなかったのである。

匂宮は、浮舟との邂逅場面において「今参りたるか」「今参りの口惜しからぬなめり」「いとおしなべての今参りにはあらざめり」と、「今参り」に類する語を重ねながら浮舟に対する関心を深めて

いく。「今参り」ということばが女房や女童にのみ用いられていたことをふまえると、匂宮は浮舟を新参の女房であると認識し、だからこそ強く引き寄せられていったといえる。そうした匂宮の意識は両者の物語の後半に至っても変わることがない。

右近は、よろづに例の言ひ紛らはして、御衣など奉りたり。今日は乱れたる髪すこし梳らせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく着かへてゐたまへり。侍従も、あやしき褶着たりしを、あざやぎたれば、その装をとりたまひて、君に着せたまひて、御手水まゐらせたまふ。姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにしたまひてむかし、いとやむことなき際の人多かれど、かばかりのさましたるは難くやと見たまふ。

（「浮舟」⑥一五五頁）

匂宮は、傍線部のように、女房の侍従が付けていた装をとって浮舟に付けさせ、手水の世話をさせている。これは明らかに浮舟を女房と見ていることを示している。さらに、波線部では女一の宮のもとに浮舟を奉仕させたならば、と考慮しており、薫が危惧していたような、女房として仕えさせて召人にしようと考えている。匂宮は物語を通じて浮舟を女房としてしか見ていないのである。

「東屋」巻の邂逅場面において、匂宮は浮舟に対して「今参りたるか」と思い、興味を示した。常陸介郎において、多くの女房た

ちに囲まれていた浮舟は、たしかに姫君として存在していたといえる。しかし、その女房たちを奪われ、二条院に移ってきた浮舟は「今参り」を与えられるだけの「今参り」の女房でしかなかった。そうした意味において、匂宮の誤解は誤解ではなかったともいえる。異母姉妹である中の君には妹として扱われず、匂宮には一貫して女房と見られる中で、薫だけが浮舟の格上げをはかろうとしていた。しかし、もともと八の宮の女房であった中将の君の娘という浮舟の出自を考えれば、浮舟は女房をこえる立場にはなり得なかつたのである。

浮舟が匂宮に「今参り」の女房だと認識されたことで両者の物語が始まっていく。ふたりが結ばれることがあろうとも、浮舟は匂宮の召人になるほかはない。「東屋」巻の邂逅場面において、ふたりの物語が男女の物語には発展し得ないことがすでに規定されていたのである。

注(一)『源氏物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『源氏物語』により、巻名、冊数、頁数を付す。以下、同じ。

(二)『岷江入楚』(中野幸一編、源氏物語古註釈叢刊『岷江入楚』第 四巻、武蔵野書院、二〇〇〇年九月、三五五頁)、『源氏物語湖月抄』(講談社学術文庫、頭注)、『新潮日本古典集成』(新潮社、現代語訳)、『新日本古典文学大系』(岩波書店、脚注)、『日本古

典文学全集』(小学館、頭注)、『新編日本古典文学全集』(小学館、頭注)、梅野きみ子他編『源氏物語注釈十』(風間書房、二〇一四年一月、四一八頁)。

(三) 佐伯梅友『源氏物語講読下』(武蔵野書院、一九九二年二月、三九〇頁、現代語訳)、玉上琢彌『源氏物語評釈 第十一巻』(角川書店、三八四頁、現代語訳)、『日本古典文学大系』(岩波書店、頭注)、『日本古典文学全集』(小学館、現代語訳)、『新編日本古典文学全集』(小学館、現代語訳)。

(四) 野村精一『源氏物語の問題—宇治十帖の人間像(一)—』『国語と国文学』三六一—四、一九五九年四月。

(五) 主な先行研究として、大朝雄二「匂宮論のための覚え書き」(『源氏物語の探究 第二輯』風間書房、一九七六年五月)、鈴木泰恵「匂宮—負性の内面化とヒーロー喪失—」(『源氏物語講座』第二巻、勉誠社、一九九一年九月)などがある。

(六) 山上義実「匂宮試論—色好みの魅力と限界—」『人物で読む源氏物語 第一八巻—匂宮・八宮』勉誠出版、二〇〇六年一月。

(七) 稲賀敬二は、「早蕨」巻までの匂宮は周囲の人々によって「好色人」の虚像を結ばされ「いたもの」の、「宿木」巻になると変容し、浮舟物語は「浮気な好色人」匂宮の定着とともに始まる」と論じる(「匂宮—源氏物語の人物造型—」『源氏物語』とその享受資料』稲賀敬二コレクション3、笠間書院、二〇〇七年七月、一〇六頁)。また、主な先行研究として、仲田庸幸「恋愛と仏道—薫と匂宮—」(『源氏物語の探求』第九輯、風間書房、一九八四年四月)、甲斐睦朗「源氏物語の人物把握の—方法—」(『宮の人間像を中心に—』(『人物で読む源氏物語 第一八巻—匂宮・八宮』勉誠出版、二〇〇六年一月)、長尾美都子「浮舟—

- 薫・匂宮の愛情について―(『平安文学研究』七三、一九八五年六月) などがある。
- (8) 新編日本古典文学全集『源氏物語』『浮舟』⑥一六八頁、頭注。
- (9) 『枕草子』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『枕草子』により、章段名、頁数を付す。以下、同じ。
- (10) 『栄花物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『栄花物語』により、巻名、巻数、頁数を付す。以下、同じ。
- (11) 新編日本古典文学全集『十訓抄』一ノ二十三、六五頁。
- (12) 新編日本古典文学全集は「若い殿方にとっては新参の女房は好奇心の対象である」とする(「心にくきもの」三三二頁、頭注)。
- (13) 『落窪物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『落窪物語』により、巻数、頁数を付す。以下、同じ。
- (14) 齋木泰孝は視覚の対象となる女童は主人たる女君の境遇を端的に表す者であるとし(『侍女の職能分担(大人・童、下仕など)―円融・花山朝、宇津保・落窪の世界―』『物語文学の方法と注釈』和泉書院、一九九六年六月)、蟹江希世子は女童が女君および家の権力・経済力や趣味・教養といったすべてを象徴する役割を担うことを指摘する(『平安朝「童」考―物語の方法として』『古代文学研究(第二次)』六、一九九七年一〇月)。
- (15) 新編日本古典文学全集『栄花物語』巻第六「かかやく藤壺」①三〇〇頁、頭注。
- (16) 『栄花物語』における威子の入内の折の記事には「女童は、その夜の御車寄するまで選り調へさせたまへるほど推しはかるべし」とあり(巻第十四「あさみどり」②一三七頁、慎重に女童の選定がなされていたことがうかがえる)。
- (17) 「家」における女主人のあり方については、服藤早苗『平安朝の家と女性』(平凡社、一九九七年六月) など。
- (18) 三村友希は明石中宮の「匂宮に対する(へいさめ)」について、今上帝や夕霧の思惑を集約し、「母親としての監督権と支配権を最大限に行使」した「自信に満ちた主張であった」とする(『明石中宮の言葉と身体―へいさめ』から「病」へ)『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上―』翰林書房、二〇〇八年一〇月、一六二、一六六頁)。
- (19) 鈴木日出男は、折口信夫のいろいろのみ論をふまえつつ「いろいろのみ」とは相手の魂に深く作用して、その心を奪い取ることでできる力のことである」とする(「へいさめのみ」と和歌)『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年二月、一五〇頁)が、「刹那的享乐的な情熱で何ら未来への保証を持たない」とも評される匂宮のあり方(大朝雄二「源氏物語の匂宮(横笛、御法の巻および統篇十三帖)」『国文学』三四一九、一九八九年七月)は、光源氏のそれとは異なっているといえよう。
- (20) 梅野きみ子他編『源氏物語注釈十』風間書房、二〇一四年一〇月、四一八頁。
- (21) 新編日本古典文学全集頭注は「女御方への使者としては下賤すぎる」と指摘する(「常夏」③二五〇頁)。また、近江の君は研究史においても笑われる女君として位置付けられ、研究史については稲垣智花「近江の君―ある「愚か者」の場合―」(『源氏物語講座第二巻物語を織りなす人々』勉誠社、一九九一年九月)にまとめられている。
- (22) 『栄花物語』においては道兼女の出仕の折に「大人十人、童女一人下仕」を整えたことが記されている(巻第十四「あさみどり」②一四三―一四四頁)。

(23) 内大臣は「女御の御方などにまじらはせて、さるをこの者にしないでむ」と考えており、「常夏」③二四一頁、新編日本古典文学全集頭注は「自分の不見識を非難されないうために、娘を誰の目にもそれと分る道化者に仕立てよう」としていると指摘する(同上)。

(24) 新編日本古典文学全集頭注は「浮舟に褶を着けさせて洗面の介添をさせるのは、召使としての扱ひ」であるとし、「浮舟の身分も見当がついた」ことを示すと指摘する(「浮舟」⑥一五五頁)。

(本学大学院博士後期課程在学中)